

いつか漂着するまで —水野成夫とフジサンケイグループ—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

若くして革命運動に身を投じた水野成夫(1899-1972)は治安維持法違反で逮捕され、かつてない運命の岐路に立たされる。激しい葛藤の末に獄中で転向を表明し、出獄後はフランス文学の翻訳家として政治活動から遠ざかった。

太平洋戦争によって転機が訪れ、軍部の後ろ盾による会社経営で政財界の名だたる人脈に連なっていく。戦後は財界によるマスコミ対策のエースとして文化放送、フジテレビ、産経新聞の社長を歴任し、フジサンケイグループの礎を築いた。最盛期は池田勇人内閣のブレーンとして財界四天王の巨魁と目される。

戦前・戦中・戦後を通じた水野の波瀾に充ちた足跡は急激な時代の変化と連動している。急旋回する歴史の節々で政財界の光と闇を象徴する特異な役柄を演じた。

革命に挫折した苦境の味

水野は静岡県佐倉村(現在の御前崎市)の裕福な村長の家の三男として生まれた。旧制静岡中学から第一高等学校に進み、文学に親しむ傍ら柔道部の猛者として鳴らした。東京帝国大学法学部に入学すると学生運動に打ち込み、革命家を志して日本共産党に入党する。

卒業後はのちに同党議長となる野坂参三が所長を務める産業労働調査所の経営を建てなおし、有能な幹部候補生として頭角をあらわす。1927年、

アジアにおける革命運動を指導するコミンテルン極東政治局の日本代表として中国に派遣され、共産党と国民党が連立した武漢国民政府樹立の一翼を担う。翌年帰国して機関紙・赤旗の初代編集長に就任した。

1928年3月15日、治安維持法の成立によって非合法化された共産党員らの一斉検挙を狙った三・一五事件で逮捕される。指導部の一員として市ヶ谷刑務所に収監された水野は過酷な取り調べの果てに転向した。戦後になって中央公論に寄稿した手記『苦境の味』で「獄中で二年余り熟慮の末、自分の信念に従って転向した。共産党員としての転向声明は僕が最初で、その為『水野を殺せ』と云って獄の内外からしきりに脅迫されたが、僕は屈しなかった」と当時を回想している。

出獄後、体制内改革派として党内分派活動を画策したものの挫折し、政治活動から身を引いた。生計を立てるために東大仏法科時代から得意だったフランス語を学びなおし、文学を中心に翻訳家としての才能を発揮する。なかでもアナトール・



水野成夫

フランスの『神々は渴く』やアンドレ・モーロアの『英国史』は名訳としてロングセラーになった。

マスコミ三冠王として君臨

1938年、水野と共に転向した親友の南喜一が軍用の再生紙製造を陸軍軍事課長の岩畔豪雄に働きかける。国策による紙の需給を考えていた岩畔は同年、日清紡績社長の宮島清次郎を初代社長に迎えて国策パルプを設立。同社の全額出資で新たに大日本再生製紙を立ち上げ、周囲の反対を押し切って元共産党員の水野と南に経営を任せる。当時の陸軍担当事務官が水野と協力してフジテレビを開局することになる鹿内信隆だった。

1945年、大日本再生製紙は国策パルプと合併し、水野は常務取締役のポストに就く。社長の宮島とは師弟関係にあり、後年「どういう人に師事するか、どういう友人を持つかということで、その人の一生が決まるともいえる」と述懐している。

翌年、経済同友会の幹事となり、戦後の混乱期のなかで激化する労働運動の鎮静化へフィクサー的な役割を果たした。日経連の初代専務理事を務めていた鹿内と共に労働問題のエキスパートとして財界首脳から頼りにされる存在となり、1951年に国策パルプの社長に昇格する。

1956年、マスコミ対策を重視する財界の意向を受けて民間会社に改組された文化放送の社長に就任。翌年、ニッポン放送の専務を務めていた鹿内と共にフジテレビを設立して初代社長となる。

1958年には経営難に陥っていた産経新聞を買収して社長に就任し、ラジオ、テレビ、新聞を手中にしたことでマスコミ三冠王と呼ばれた。

産経新聞の買収は取引銀行である住友銀行の堀田庄三頭取の要請によって実行された。資金は財界有志から拠出されたといわれている。

経営陣には取締役として東急社長の五島昇や信越化学社長の小坂徳三郎らが名を連ねた。鹿内は監査役を務めている。

会社再建に向けて労働組合と平和維持協定を締結し、労使一体の体制を築いて1年後に黒字転換を実現する。しかしその一方で産経新聞労組は新聞労連から脱退し、合理化による大量の配転・解雇などで産経新聞残酷物語などと他のメディアから批判された。

さまよえる船のように

60年安保闘争によって退陣に追い込まれた岸信介の後任として大蔵大臣の池田勇人が1960年7月に首相の座に着く。水野は日清紡社長の桜田武、富士製鉄社長の永野重雄、ニッポン放送社長の植村甲午郎、住友銀行頭取の堀田らと共に池田を支援する二黒会のメンバーであり、彼らを中心に財界のマスコミ対策委員会が組織されていた。

池田は国会の施政方針演説で「新聞、ラジオ、テレビ等は、家庭、学校、社会の三つを通じ、人づくりの環境を整える最も強力な手段となりつつあります」と述べて各言論機関の責任者を「社会教育の先達者」と持ち上げた。暗に政府・自民党寄りの報道を促す池田に呼応して水野は産経新聞を筆頭に保守化の傾向を強めていく。池田も水野を自宅に招くなど他のメディアと別格扱いにして蜜月関係を深めた。

戦時中から築いた多彩な人脈を駆使して政財界の強固な一角を占めた水野は桜田武、永野重雄、富国生命保険社長の小林中と共に財界四天王と評されるようになる。無類の野球好きで1965年に国鉄スワローズを買収し、フジテレビで放送していた日本初のアニメ番組・鉄腕アトムにちなんでサンケイアトムズと命名した。

1967年、フジテレビ、ニッポン放送、文化放送、産経新聞を統合してフジサンケイグループを結成。翌年、病気で倒れ、サンケイアトムズの経営権を南喜一が代表を務めるヤクルトに売却した。それから4年後に72歳で他界する。

フジサンケイグループは鹿内が掌握し、さらなる右傾化路線へ純化していった。長男の水野誠一は西武百貨店の社長となり、新党さきがけの参院議員として政界に進出する。

1959年に行った講演で水野は「いろいろ人生をさまよいまして、悪運強くといった方が適当かもしれませんが、生き延びまして今の立場にさまよっていた、漂流して漂着したというのが本当ではないかと思うのであります」と語っている。成功者でありながら「漂流して漂着した」と生涯を顧みるところに水野の複雑な心境がうかがえる。

漂着した船は果たして救われたのだろうか。